

学会ハイライト

第70回日本皮膚科学会西部支部学術大会を終えて

(2018年11月10日, 11日, 島根県民会館)

森田 栄伸

島根大学医学部皮膚科学講座 教授

発想の転換～既成概念を打ち破る～

2018年は西部支部学術大会の第70回という節目の年であり、参加者の印象に残る学術大会を開催したいとの思いで準備しました。学会のテーマを「発想の転換～既成概念を打ち破る～」といたしました。医学においては先達の研究により多くの疾病の原因病態解明がなされ、その成果は有効な治療法の開発に寄与してきました。その中には、従来の常識を覆すような数々の研究が含まれます。利根川進さんの分子生物学的手法を用いた抗体多様性の機序の解明は、それまで抗体産生における通説であったクローン選択説を覆す発見であり、それにより免疫学と抗体製剤の大きな進歩をもたらしました。山中伸弥先生によるiPSの発見は、わずか数個の遺伝子導入で皮膚の細胞を多能性幹細胞へ転換できるという画期的なもので、今後の医療を大きく変えようとしています。アレルギー領域では、Gideon Lack先生の二重抗原曝露仮説があります。食物アレルギーは抗原の消化管経路の感作ではなく経皮感作によるとする学説で、食物アレルギーの既成概念を打ち破るものでした。皮膚科の分野においても、発想を転換してそれまでの思い込みを打ち破ることでいろいろな発見が得られるはずです。この学術大会では、発想の転換から得られた研究成果が集積され、今後の皮膚科学研究や診療の進歩に活かされることを祈願して

プログラムを組みました。

まず最初に、「発想の転換」をイメージした宣伝ポスターを作成しました(図1)。ポスターをみてまず目が行くのは、月夜の晩に海原を翔る白うさぎですが、少し離れてみれば波間から顔を上げる



図1 学術大会宣伝用のポスター



図2 オレンジのスタッフジャンパーを身にまとった島大スタッフ

鯨の頭が浮かび上がってみえます。ありふれた医学的事象も、見方を変えればそこから新しい発見が得られるかもしれません。

オレンジ色のスタッフジャンパーと リュックサック

島根大学のスタッフはオリジナルのジャンパーを着用することにしました。会場で島根大学のスタッフと一目でわかるようにするためです。目立つ色にしたいと、学会カラーである黄色にしようかと思いましたが、それでは2015年に島根で開催した皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会のときと重なりますので、思い切ってオレンジ色にしました(図2)。学会会場でもずいぶんと目立っていると満足しています。

コングレスバッグも従来から使用されていた手提げ型からリュックサックにしました。リュックサックは荷物をもっていても両手が使えることから、とても機動的に行動ができると考えたからです。また、ロゴマークは島根県の有名な玉造温泉をイメージしました(図1右下)。温泉にもっとも似合うのは女性の湯浴みですが、それではまずいので温泉にもっとも似合う動物をいろいろ考えて

カピバラとなりました。島根にカピバラは生息していませんが、これも発想の転換という観点からとても気に入っています。

プログラムにiSCAR2018を組み入れて

特別講演は東京大学の佐藤伸一先生にお願いしました。佐藤先生には長崎大学皮膚科の教授としてご在籍のときから懇意にいただいていた。強皮症がご専門でありながらアレルギー疾患の病態にも精通されており、とてもわかりやすい講演をされておられましたので、本学術大会ではご専門の強皮症のお話をじっくりお聞きしたいとかねてから考えておりました。ご講演では強皮症の病態を線維化、血行障害、免疫の活性化の3つの観点から説明いただき、それぞれの治療法の進展を解説されました。私などは強皮症は治らない病気と思っておりましたが、強皮症治療の従来の概念を覆すようなお話を聞くことができ、学術大会のテーマである「発想の転換」を盛り上げる大きな柱を立てていただいたと感謝しております(図3)。

この学術大会の特徴の一つは、重症薬疹の国際シンポジウム・iSCAR2018を合わせて開催したことです。これは以前から台湾のChang Gung



図3 特別講演をされる佐藤教授



図5 神楽「八岐大蛇」の上演風景



図4 重症薬疹の国際シンポジウム・iSCAR2018の会場風景



図6 乾杯の音頭を取られる山元支部長

Memorial HospitalのChung教授から依頼されていたシンポジウムです。iSCARは1994年パリで第1回が開催されて以来、ほぼ2年ごとに開催されておりましたが、今回第10回iSCARを私が担当することになったわけです。1日半のプログラムで30名の演者に講演をいただきました。海外からの参加者も多く、会場はいつも満席状態となり(図4)、一番小さいEルームを割り当てたことを後悔いたしました。

教育講演には、抗体製剤の登場でもっとも注目を集めているメラノーマ、乾癬、アレルギーを取り上げました。メラノーマでは本庶佑先生のご研究に由来する抗PD-1抗体製剤の登場から治療法が激変していることはご存知の通りで、それに関連するスポンサードシンポジウムやスポンサードセミナーが多く開催されました。乾癬、アレルギー

領域においても多くの抗体製剤が市場に投入され、あるいは開発されており、それぞれの会場で議論の盛り上がりが見られました。

山陰の文化と食材を堪能する企画

本学術大会のもう一つの特徴は、山陰の文化と食材を堪能していただいたことでした。懇親会は、学術大会の島根県民会館から少し離れた松江フォーゲルパークで行いました。松江フォーゲルパークは野外のテーマパークですが、全天候型の屋内会場を附設しておりますので、こちらを懇親会会場としました。開演に先立って山陰の伝統的文化である神楽「八岐大蛇」を用意しました。私の中学校の同級である岩岡幸人君が率いる伊賀和志神楽団をお招きして上演していただいたものです。出雲神話のヒーロー・スサノオノミコトが



図7 お酒や山陰の食材を堪能するiSCARメンバーの皆様

八岐大蛇を退治する話を題材にした舞で、スサノオノミコトと八岐大蛇の勇壮な戦いが見ものです(図5)。

その後の懇親会では、まず山元 修支部長(鳥取大学)のご挨拶と乾杯をいただき(図6)、その後会員相互の歓談となりました。この学術大会では海外からのお客さんも多かったので、私と千貫祐子事務局長は和服で登場させていただきました(図6)。吊り下げ型のお花が満載された懇親会会場には、生きカニ、活イカ、隠岐和牛などをふんだんにご用意させていただきましたので、ご参加の皆様には山陰の食材を堪能いただけたものと思っています(図7)。懇親会の途中に伊賀和志神楽団の鬼が乱入するというアトラクションを入れさせて



図8 鬼退治に挑むも返り討ちにされる大会会長

いただき、大会会長の私が鬼退治に挑むもあえなく討ち死にするという趣向となりました(図8)。最後には、料理の屋台を担当してくれていたぎんりんグループ「くのいち忍者隊」と千貫事務局長が無事退治してくれました。懇親会では多少ハメを外してしまいましたが、ご参加いただいた方々には、十分楽しんでいただけたのではないかと思います。

学術大会の運営に際しては、何かとご無理をお願いするもすべてご快諾いただき開催に尽力いただきました日本皮膚科学会の山田紀子様をはじめとする事務局の皆様、懇親会を準備いただいた、ぎんりんグループの皆様、伊賀和志神楽団の皆様に深謝いたします。